

目次

- ・ 続特別展余間「足助の江戸期塩問屋について」 2
- ・ 豊田市郷土資料館展示資料案内 3
- ・ 神宝になった考古遺物 - 鷺取神社の巻 - 4
- ・ 博学連携のススメ VOL.4 5
- ・ とよたの遺跡とその立地 6
- ・ 埋蔵文化財調査ニュース 7
- ・ 文化財シリーズ71・資料館NEWS 8

豊田市 郷土資料館 だより

No.71

Toyota City Museum
Of
Local History



土びな



御殿かざり



どうたくん・すえちゃんひなかざり

足助の江戸期塩問屋について

江戸時代、岡崎には塩座とよばれる塩商人の組織があり、営業の独占が許されていました。三河湾沿岸で生産された塩は岡崎塩座に納めなければならないことになっていました。また販売も岡崎領内、他領、天領、寺社領にあってもすべて、塩座を通さねば入手できませんでした。

そのため矢作川を船で上る塩荷は、塩座の通過をめぐり、抜荷をする者があり、荷主と紛争が絶えず、出訴におよぶこともありました。奥殿藩や尾張藩領の寺部渡辺家の台所用の塩であっても通過できず、没収されて大きな事件となったことがありました。

岡崎塩座は天正年間に織田信長につかえた国分家^{こくぶん}が尾張熱田より岡崎の八丁村に移り住み、松平氏の軍事物資を扱う商人となり、塩屋を営んだことにはじまるといわれています。のち慶長12、3年の矢作川の大洪水と町の移転で新たに座が設けられ、徳川家康から塩の専売権が与えられ、以後幕府に公認されてきました。

塩座は伝馬町と田町の町に付された特権で、商人仲間により入札で請負われ、塩荷主から1俵につき10文の座銭が徴収されていました。

明治維新により、岡崎塩座は消滅しました。座銭の徴収や、塩荷の検問などの煩わしさから解放され、自由な流通となりました。

いっぽう、足助では明治20年代に13軒の塩問屋があり、中馬による奥地輸送に備えた、塩ふみ（俵の改装・足助塩）が最盛期であり、^{たばこや}苺屋がその代表格でした。岡崎塩座の消滅に伴い通過時間と座銭徴収がなくなり、低価格で足助に流入し、各問屋での利幅が大きくなったことが想像されます。また苺屋の塩ふみの作業場が「塩座」とよばれていました。このことから岡崎塩座の消滅を反映し、その集約的中継地が足助に移ったと理解できます。

岡崎に塩座が存在した、明治維新前、江戸時代の足助における塩の扱いはどのようになっていたのでしょうか。当時、足助を代表する大商人、御用商人でもあった小出権三郎家についてみると、味噌の醸造用の塩は良質な饗庭塩（三河産）と赤穂塩（播磨産）が用いられていました。饗庭塩は岡崎田町の塩屋喜兵衛、足立久兵衛、同伝馬町の塩屋次郎兵衛、佐伯太郎右衛

門から、赤穂塩は名古屋の異国屋又兵衛、鍛冶屋町美濃屋平八、鍛冶屋町二丁目塩屋与吉、東田町竹皮屋惣吉などの問屋から直接購入していました。足助に入る塩は船で矢作川を上るルートと名古屋から飯田街道を陸路で入る二つのルートがありました。

天保期の足助の商業を分析した丸山豊氏によれば、当時足助には20職種、100軒のうち塩屋が、14軒あり、他に穀屋10軒、蚕種売り14軒がみられ、塩屋がいかに多いかがうかがわれます。明治20年代から半世紀前にあたり、すでにほぼ同数の塩を扱う商人、塩問屋が存在していたことがわかります。この事実は明治20年代の足助に入る塩の取り扱い量、仕入先、販路、輸送形態が概ね同様であったことを示唆していると考えられます。なかには明治期まで続いた問屋もあったでしょう。しかし小出家をのぞいて岡崎塩座との具体的な関わりはいまひとつ明らかではありません。当然、座銭にみあう負担や制約はあったと推測されます。足助から飯田方面の奥地への輸送は基本的には馬の背による中馬であつと思われまふ。小出家のように名古屋から入る西国塩（瀬戸内産）も相当量あったと考えられますが、岡崎塩座を介せず足助に入る塩の扱われ方も注目しなければなりません。

以上のことから、江戸時代後期、天保期には岡崎塩座の支配下にありながら、足助には14軒の塩問屋が存在し、明治期の足助塩の最盛期に匹敵する塩が扱われていたことが理解できます。西国塩の伊那街道ルートも併存し、塩の中継、商業基地、在郷町としての繁栄があり、個性的な建築と町並みを形成したのでしょう。

[参考]

丸山豊 1968 在郷町「足助」の研究 歴史研究16号
愛知教育大学歴史学会 (松井 孝宗)



苺屋（保存修理前）

「^{わにぐち}鰐口」・「三州高橋郡さなげ村検地帳」複製

豊田市郷土資料館の常設展示は「豊田のあゆみ」と題して、旧豊田市域から出土した考古資料（土器、銅鐸、鏡など）や歴史資料（鎧、掛け軸、絵図など）を展示紹介しています。この中から今回は中世期の豊田の様子をさぐるができる2つの資料を紹介します。

○鰐口

鰐口とは寺社の本堂前に吊り下げられたもので、参拝の前にひもを振り、打ち鳴らす金属製の音響具です。扁平の円形の下部に横長に口があります。展示資料は舞木町にある明王堂のもので、直径約27cm、厚みは中央部分で8.3cmほどで比較的大きいものです。

この鰐口には次のように刻まれています。

「三弐賀茂郡高橋庄（西宮）舞木邑鰐口清水洞小
太郎寄進 天正五年十月廿九日 大工水野太郎
左衛門」

これは天正5年（1577）に三河国賀茂郡高橋庄西宮に鰐口を清水洞小太郎が寄進したという意味です。西宮という文字は後年、舞木邑と訂正されています。西宮は猿投神社の西宮で、鰐口を作ったのは大工の水野太郎左衛門です。

資料に刻まれた文字からこの時代に生きた人物の名がわかります。鰐口を寄進するほどの人物が何をしていたどのような人物かまでは、この資料だけではわかりません。しかし、ある程度の権力を持った人物であることは想像できます。また、地名の表記が「高橋庄」と書かれています。荘園・高橋庄は矢作川左岸、現在の高橋地区がその中心と考えられていますが、猿投地区の猿投神社も含めて高橋庄であったとすると、荘園の範囲を知る手がかりとなる資料です。



○「三州高橋郡さなげ村検地帳」複製

この資料は天正20年（1592）の「さなげ村」の検地帳です。豊臣秀吉が行ったいわゆる「太閤検地」のもので、



表に「三州高橋郡さなげ村 御神領」「御けんち之高 一七百七拾六石壹斗七升壹合 山手共二」「紙数卅五まい上かミ共二」「さほうち吉田修理亮内 天正廿年卯月五日 樋口勝介」とあります。

検地によりまとめられた村の石高が明記され、検地を行った役人の名前が記されています。紙の数が書かれているのは、原本からの写しあるいは控えであるためでしょう。内容は耕作地の面積が耕作者の名前ごとに記載され「上中下」とその収穫量の格付けがされています。

小学校ではじめて歴史を学ぶ6年生にとっては「太閤検地」を身近に感じる学習資料となりますが、この資料が重要視されるのは「猿投村」が高橋郡と表記されているためです。高橋郡は短期間しか存在しなかった郡名です。その範囲についても明確ではないのですが、北は現在の藤岡地区の上渡合から南は碧南市、西尾市の村も高橋郡と表記された資料が残っており、その範囲は広範であったことがわかっています。高橋郡は織田信長、その子信雄、豊臣秀吉が領有した時期の郡名で関が原の合戦、慶長5年（1600）までは使われました。

「高橋郡」という郡名があったことは中世期豊田の歴史にとって欠かせない事柄です。この資料はこうした事柄を後世に伝える資料として歴史研究の資料として今後も活用されます。

（伊藤 智子）

神宝になった考古遺物

— 鷺取神社の巻 —

矢作川に架かる久澄橋を東に渡ると、やがて右側に豊田東高校が見えます。鷺取神社は、その東側の台地上（御立町）に鎮座しています。祭神は景行天皇皇子である気入彦命であり、この地に御館を構えたことから後に御立と呼ばれるようになったこと、やがて市塚に葬られたこと、そこには宝刀が埋められており、触ると病気になることなどが伝えられてきました。

市塚古墳は極楽寺北側のこんもりとした竹林の上にあります。昭和34年（1959）、南山大学が古墳の測量と部分的なトレンチ調査を実施しました。その結果、古墳は直径22m、高さ3.5mの円墳で、埋葬施設は確認できなかったものの、板石が集積した箇所があり、その間から鉄製の^{ほこ}銚^{てつぞく}1点と鉄鎌が出土しました。鉄銚は現在、鷺取神社の神宝となっています。



鷺取神社（御立町）



市塚古墳



鷺取神社・市塚古墳周辺遺跡位置図（1/25,000）

銚は槍と同じく^{ながえ}長柄に装着して刺突するための武器ですが、長柄を差し込むために基部が袋状となることが特徴です。市塚古墳の鉄銚は袋部が大きく欠損していますが、残存長42.5cm、刃部は34cmに及び、非常に大型であることが特徴です。古墳に副葬される武器としては、4～5世紀には剣・槍が、6～7世紀には直刀が一般的ですが、銚は古墳時代を通して有力な古墳にのみ少数が副葬されています。つまり、他の武器とは異なる特別な意味が込められており、邪霊を打ち払ったり、権力を象徴する武器として用いられたと考えられています。

市塚古墳の周囲1km内外には、八柱社古墳（全長38mの造出し付円墳／5世紀前半）、神明社古墳（直径27mの円墳／6世紀前葉）、不動2号墳（6世紀中葉）、南山畑古墳群（5～8世紀）など、有力な古墳が集まっています。市塚古墳の南側には別の高まりがあり、現在は市塚南古墳として登録されていますが、本来は一体の前方後円墳であった可能性もあります。鉄銚から市塚古墳の造られた時期を判断することは困難ですが、5世紀代を中心とする時期と考えられます。いずれにしても、高橋地区周辺を支配した有力首長の墓であったことは間違いありません。伝説の宝刀が貴重な鉄銚であり、ゆかりの神社で大切に祀られていることは、感慨深いものがあります。

（森 泰通）



市塚古墳出土の鉄銚



スクールサポート

博学連携ノススメ VOL.4

飯野小6年生「戦争と人々の暮らし」の学習サポート

1. 戦時資料という本物で「教材貸し出しサポート」

小学校6年生の「戦争と人々の暮らし」の学習は、我が国が戦時体制に移行したことや国民が大きな被害を受けたことが分かるようにすることをねらいとしています。

豊田市立飯野小学校では、豊田市郷土資料館の「教材貸し出しサポート」を利用し、子どもたちの理解を深めるために、本物の戦時資料を使った授業を展開しています。郷土資料館から貸し出した資料は、ゲートル・鉄兜・水筒・食器など兵士が身に着けていた資料、千人針・慰問袋・婦人会のたすきなど銃後の活動を象徴する資料などです。

児童は、教科書や資料集に載っている資料の本物が目の前に現れたことで、学習内容の理解を深め、さらに戦争中の人々の心情にまで迫っていききました。

「当時の日本の人々は、戦争でどんな体験をしたのか」

「自分の前で人がたくさん死んだり、親友が死んだりした時はどんな気持ちだったのか」

「どんな気持ちで人と人が殺しあっていたのか」など戦争を体験した人にお話を聞きたいと強く願うようになったのです。

2. 戦争体験者とともに「出前授業サポート」



＜児童の前で模型を使って話す太田氏＞

児童の追究に応えたいという飯野小学校の先生の願いで、戦争体験者を紹介しました。太田育夫氏です。

太田氏は大正10年(1921)のお生まれで、現在89歳。太平洋戦争では海軍に籍を置き、巡洋艦「矢矧」の通信兵として、戦艦「大和」



＜入隊直後の太田氏＞

とともに沖縄海上特攻作戦に参加されました。「矢矧」はまっ先に沈没しましたが、奇跡的にも生還された方です。太田氏は、当時の状況を飯野小学校6年生約130名の前で包み隠さず話され、「あの頃は死ぬことをなんとも思わなかった。私は、運よく89歳まで生き、社会のために励んでいます。」と結ばれました。

太田さんの体験談は、130名の子どもたちの胸に受け継がれ、戦争についてもう一段深く考えるきっかけになったのではないのでしょうか。

私たちは戦争について勉強しているけど、実際に戦争を体験したわけではないのであまりピンとこなかった。でも太田さんのお話を聞いて、初めて「戦争」というものがこんなにも怖いことで、こんなにも悲しいことだと知りました。(中略)これから戦争を知らない子に教えてあげたいです。戦争体験者の方はどんどん減っていってしまいます。それはとても悲しいです。今の日本は、昔お国のために覚悟を決め、全力で戦った人たちのおかげだということを忘れたくないです。

＜飯野小学校 6年生 TH＞

＜太田氏の話聞いた児童の感想＞

3. H21年度のスクールサポート実績

今年度のスクールサポートへの利用状況は、113校、7579名(2010.3現在)です。

来年度も、先生・児童生徒の要望にお応えし、本物体験を通して少しでも子どもたちの学習に役立てるよう準備をしていく予定です。(伊藤 俊満)

とよたの遺跡とその立地

豊田市が初めて正式な発掘を行ったのは、昭和38年（1963）の豊田大塚古墳であり、現在までの間に約350件近くの発掘が行われました。同時に文化財保護の基礎となる遺跡の位置確認も進み、昭和48年（1973）刊行の「豊田市の遺跡」における333遺跡から、平成11年（1999）刊行の「豊田市遺跡分布図」では482遺跡に増え、平成17年4月に6町村が加わったことで遺跡数は1,000を超えました。これらの遺跡は所属する時代・性格のみではなく、地域ごとに遺跡の立地する地形に違いがあることがわかっています。

旧市内のうち高橋・挙母地区は、矢作川兩岸約2kmの範囲が、市中心地に向かって下る5段の階段状地形（河岸段丘）となっています。この高燥な平坦地には旧石器時代から人が住み、高橋遺跡・梅坪遺跡など弥生～平安時代頃の大集落が形成されました。

近年、遺跡は段丘のみではなく、矢作川に近接した低地（沖積地）にも存在しており、段丘上では考えられないほど地中深く埋もれていることがわかっています。このような低地遺跡が認識されるきっかけとなったのが、平成7～9年に行われた千石遺跡の調査です。

この調査では縄文時代以降、矢作川の洪水の影響を受けて土地が埋まりつつも、近世に至るまで人が活動し続けた状況が確認されました。特に圧巻だったのは、地表下約3.5mの低位から縄文時代の遺構・遺物が確認されたことです。このような低地遺跡の調査はその後も続き、花本遺跡・万加田遺跡・寺部遺跡などがこれまでに調査されています。特に昨年調査された寺部遺跡では、縄文時代のドングリ貯蔵穴、古代の溜め池と木製農耕具が見つかりました。植物質の遺物が良好に残存することは、湿潤な環境となる低地遺跡以外では極めて稀なことから、原始・古代の生活に関わる情報の宝庫と言えます。自分個人として思い出深いのは、千石遺跡の調査当時、考古学専攻の学生として現地を見学した際のことです。地下から高くそびえる調査区の壁に土と砂が累々と堆積する様子に驚愕し、十分に周辺地形や地層を観察した上で過去から現在への地形変化を理解することや、それを踏まえて遺跡の有無や

立地の意味を考察することの大切さを知りました。

最近、足助・小原地区など山間部の遺跡分布調査や工事立会を行う中でも新しい発見がありました。県指定史跡である今朝平遺跡の北部で、電柱新設に先駆けて工事立会を行った際のことです。電柱を立てるためのわずか50cm四方に満たない狭い穴に潜り、地層の状況を観察しました。すると、現在の地表から170cmほど下に、土器を大量に含む黒色土が確認されました。ここは過去、遺跡範囲ではない地点でしたが、平成20年度に行った分布調査の際、万全を期して遺跡に含めた地点です。背後の丘陵と足助川に至る地形をよく観察した結果、過去に山肌が大きくえぐれ、川に向かって土砂崩れを起こした様子が確認でき、遺跡が深く埋没したのもその影響によると考えました。このような地形は「崖錐^{がいつい}」と呼ばれ、花崗岩など風化しやすい岩石に富む地域で確認されます。当市内にも数多く点在し、崖錐の下には、崖崩れで供給された土砂により平坦な微高地が形成されることから、原始から現在に至るまで重要な居住の場となったようです。

遺跡は、地中に深く埋もれていることから、他の文化財に比べ発見されにくいという特徴があります。遺跡の調査にかかわってきた先人たちの地道な努力の成果を学びつつ、自身もさらにそれを深めていければと思います。

（高橋健太郎）



今朝平遺跡（電柱予定地）



埋蔵文化財調査ニュース



郷上遺跡〔鴛鴨町郷上〕

ガス設備敷設に伴う調査を実施しました。調査対象地は高速道路建設に伴う愛知県埋蔵文化財センターの調査地点と物流センター建設に伴う市教育委員会の平成20年の調査地点の中間に位置した約20㎡の区画です。非常に狭い調査区のため、見つかった遺構は溝1条と柱穴などでした。出土遺物は須恵器・土師器・中世陶器などがありましたが、量的には少量でした。狭い範囲の調査でしたが、出土した遺物と遺構の状況から古墳時代～古代と中世の2つの生活面があったことがわかりました。



〔郷上遺跡 調査完了状況〕

上万場遺跡〔浅谷町上万場〕

市道拡幅事業に先立ち、遺跡の調査を行いました。上万場遺跡は旭地区の岐阜県境近くに位置し、平成2年に県道建設に伴う調査が実施され、縄文時代の竪穴建物などが見つかっています。今回の調査は道路の拡幅に伴う約85㎡の調査で、細長く狭い範囲でしたが、竪穴建物や土坑などの遺構が見つかりました。竪穴建物からは弥生時代終わり頃の土器が出土しました。西三河地方の山間部の遺跡における弥生時代の遺構・遺物の発見はこれまでほとんどないため、今回の出土は量的にはわずかですが、貴重な発見となりました。他には縄文土器や中世の陶器などが出土しています。



〔上万場遺跡 土器出土状況〕

鳥狩塚古墳〔渡刈町大明神〕

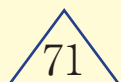
駐車場整備事業に先立ち、範囲確認調査を実施しました。古墳の現状の測量を行うとともに、墳丘と周溝（古墳の裾を巡る溝）の範囲を確認するために4本のトレンチ（試し掘りの溝）を設定しました。調査の結果、確認された周溝は幅が約5.5mであり、古墳は直径約24.5m（周溝を含めると約32m）の円墳と想定されます。遺物は墳丘盛土内から土師器、墳丘流土内から中世陶器などが少量出土しています。



〔鳥狩塚古墳 調査完了状況〕

（杉浦 裕幸）

文化財シリーズ



県指定文化財
小原村前洞のシキザクラ

「小原村前洞のシキザクラ」は、前洞町(小原地区)にあり、明治39年(1906)日露戦争直後に植樹されました。本樹は、根囲高1.39m、胸高囲1.64m、樹高5.0m、枝張り東西8.5m、南北10.5mに及ぶ老木です。秋の彼岸頃から花が咲きはじめ、冬の間も花数は少なくなりますが咲き続けます。また、春には再び白～淡紅色の花をつけた姿を見せてくれます。

現在、四季咲き性のサクラは各所にみられ、決して珍しいものではありませんが、植樹から100余年の老木で、大きさはもとより、樹齢のはっきりしたものは県内では他に例がありません。

本樹は、昭和46年(1971)に小原村の天然記念物に指定され、その後昭和59年(1984)11月28日に県の指定となりました。



小原村前洞のシキザクラ

資料館 NEWS

冬休み子ども週間(12/19～1/11)を開催しました。

すごろく、カルタ、こままわし、羽子板で羽根つきなど、お正月の昔ながらの遊びを親子で楽しむ姿が見られました。

来館したお客様より、「そういえば最近、道路で羽根つきをする子どもを見かけなくなったなあ。場所がないのかな。」という声が聞かれました。実際に、郷土資料館で初めて羽根つきをする子どもも多く、大人には懐かしい遊びも子どもには新鮮に映るようでした。

冷たい風が吹く中、郷土資料館の庭園でカンカンという羽根つきの音を聞いていると、お正月がきたということが肌で感じられました。これからも、郷土資料館では季節の移り変わりを体感できるような昔ながらの遊び・行事を子ども達に伝えていきたいと考えています。



〈羽根つきの様子〉

「文化財防火デー」

1月18日から2月2日にかけて、5ヶ所(医王寺、六鹿邸、平勝寺、祝峰寺、長興寺)で文化財防火デーにともなう防火訓練が行われました。内容は通報の練習や、水消火器を使つての消火訓練、竹の棒と毛布を使って簡易担架を作成するなどの本格的なものでした。緊迫した雰囲気の中、地元の方々のご協力も得て、無事訓練を終了することができました。



利用案内

開館時間 9:00～17:00
休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)
入場料 無料(特別展開催中は有料)
交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分
名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分
愛知環状鉄道「新豊田駅」より 徒歩15分
駐車場 約20台

■豊田市郷土資料館だより No.71 ■

平成22年3月20日発行
編集・発行 豊田市郷土資料館
〒471-0079 豊田市陣中町1-21
☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095
E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL: <http://www.toyota-rekihaku.com>
※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。